鎌倉街道周辺遺跡（かまくらかいどうしゅうへん）

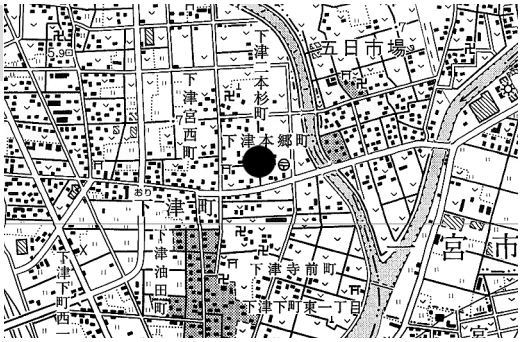
所　在　地　稲沢市下津本郷町・下津宮西町
（北緯35度15分19秒 東経136度49分52秒）

調査理由　県道名古屋豊山稲沢線建設

調査期間　平成23年4月～平成23年6月

調査面積　830㎡

担　当　者　鈴木正貴



調査地点（1/2.5万「一宮」）

調査の経過　調査は愛知県建設部道路建設課による県道名古屋豊山稲沢線建設工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成23年４月から６月にかけて実施された。調査面積は830㎡であり、昨年度の調査に引き続く形でＡａ区・Ａｂ区・Ｂａ区・Ｂｂ区・Ｄ区の５調査区に分けて調査を行った。

立地と環境　鎌倉街道周辺遺跡は青木川右岸に所在する南北約3.0km、東西約1.5kmの範囲にわたる広大な遺跡である。青木川によって形成された自然堤防およびその後背湿地に立地しており、標高は約６～７mを測る。昨年度の調査では古代末から中世の遺構・遺物が濃密に展開していることが明らかになり、その豊富な内容から、下津宿あるいは尾張守護所下津の一部に相当すると考えられ、中世都市の具体的な様相を知る上で重要な成果となっている。

調査の概要　今回の調査では、昨年度と同様に、古代末から中世までの様々な遺構や遺物が確認された。遺構は激しく重複する場合があり、時期区分を整理することは容易ではない。調査区ごとに概要を説明する。

Aa区　Ａａ区では２面調査を行い、１面で12世紀～15世紀、２面で10世紀～12世紀の遺構や遺物が確認された。両面とも柱穴が多数検出され、掘立柱建物跡が複数建てられたものと考えられる。10Ａ区で確認された溝に囲まれた区画が屋敷であったと推測される。

Ab区　Ａｂ区では、12世紀～13世紀頃の大型土坑と15世紀頃の柱穴が発見された。

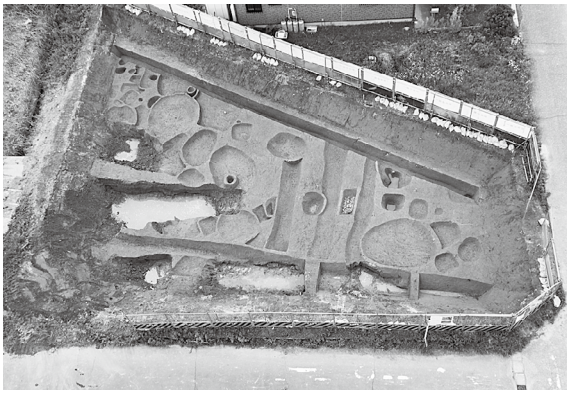
Ba区　Ｂａ区では５面調査を行ったが、概ね３時期に整理される。15世紀では、深さ1m以上の大溝が東西方向に２条平行して検出された。通路および屋敷を構成したものと推測される。14世紀～15世紀前半では、長さが1m前後の長方形の土坑が点在した。12世紀では、竪穴状遺構と柱穴群が確認されたが、その性格は不明である。

Bb区　Ｂｂ区では２面調査を行い、１面で14世紀～15世紀の東西溝１条と南北溝３条、２面で12世紀～15世紀の南北溝２条などの遺構が確認された。この地点では、屋敷割は少なくとも２回は変更され、多数の柱穴の存在から屋敷の中に掘立柱建物跡が存在したと想定される。２条の溝の間には円礫をきれいに敷き並べた石敷遺構が存在する。

Ｄ区　Ｄ区では４面調査を行い、１面では昨年度の調査で鎌倉街道と推定された幅が約10mの高まりの延長部が南北に伸びる形で確認された。この道路状遺構は15世紀中頃までの柱穴などを整地して作られたこと、少なくとも18世紀には畑の耕作土が堆積して畝と思われる小溝が掘削されたこと、道路面付近で16世紀の遺物も出土したことから、この部分の道路状遺構は15世紀中頃以降16世紀を中心とする時期に機能していたと想定される。

２面～４面では道路状遺構以前の遺構が多数確認され、地区により遺構の様相が異なっている。調査区東部では柱穴が多く展開し、掘立柱建物が建っていたと推測された。中央部では深さが30cm程度の長方形土坑がいくつか発見され、長方形土坑1222ＳＫの床面土

Aa区１面全景



Bb区１面全景

Ba区５面全景

Bb区２面全景

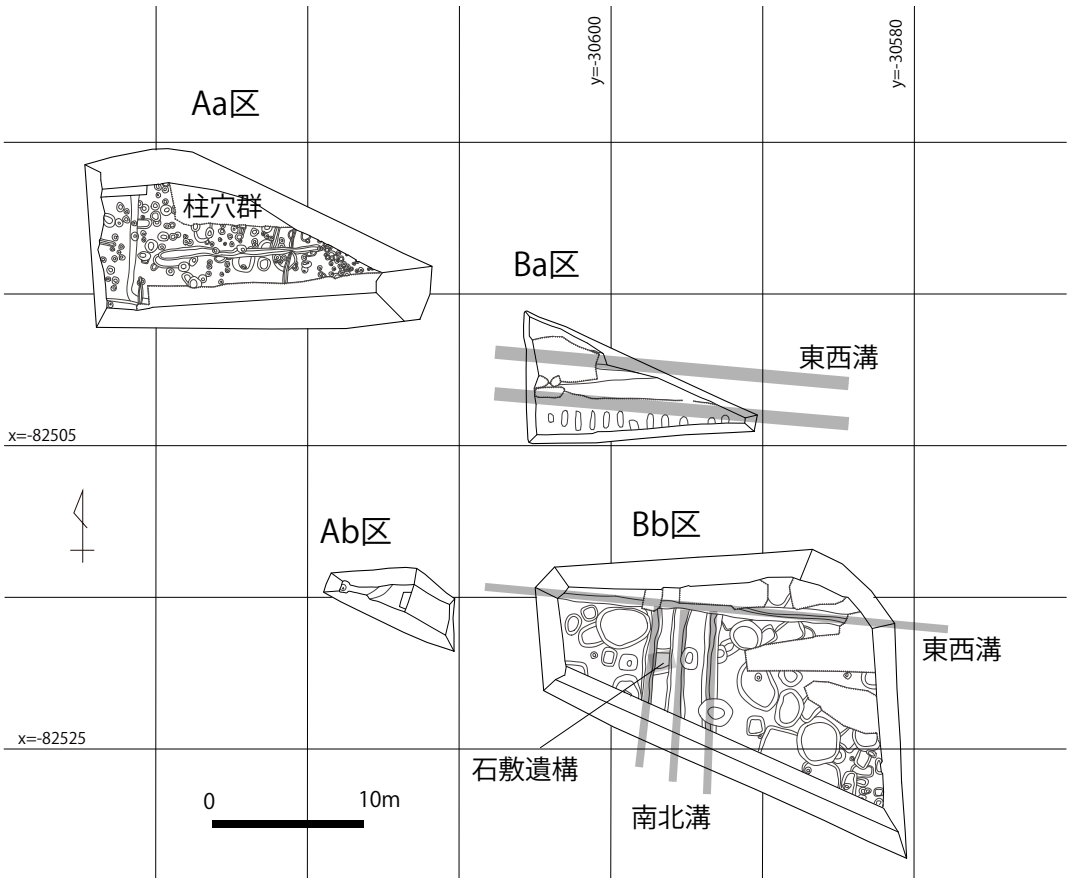


図１　A･B区１面遺構図

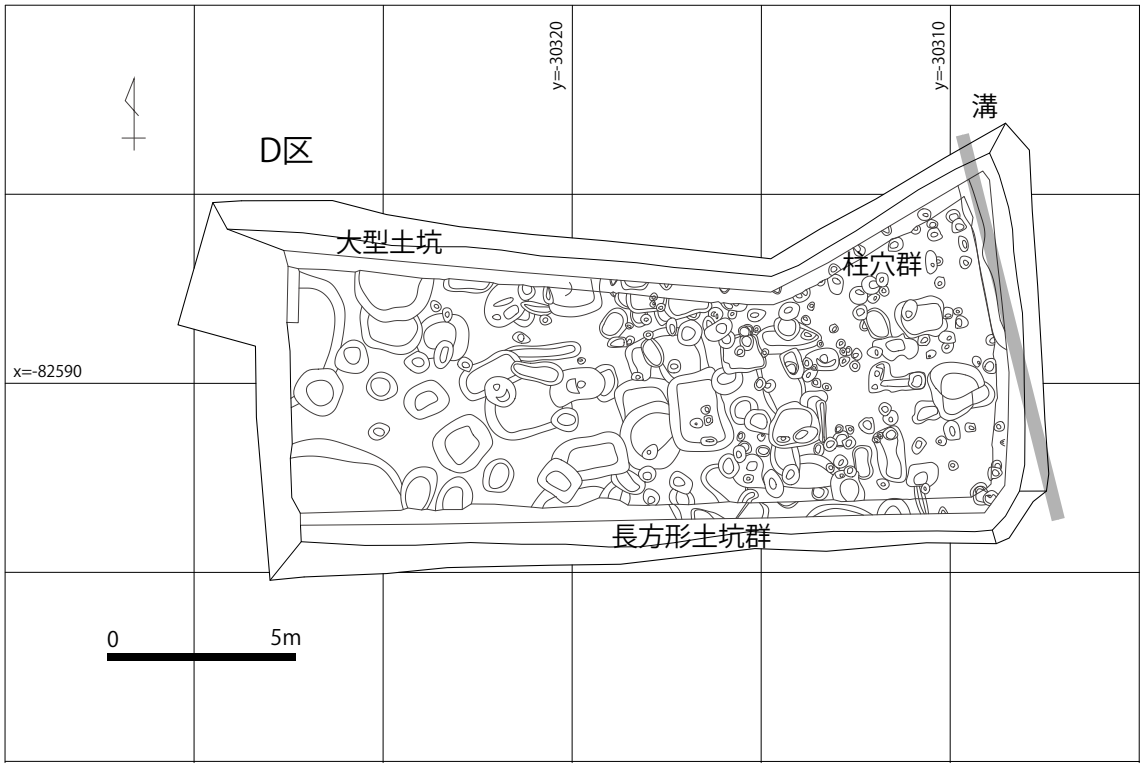
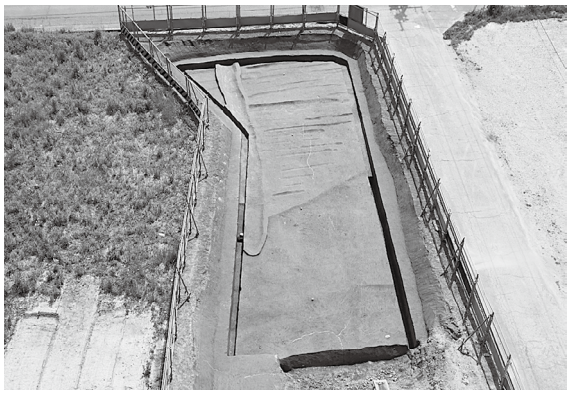
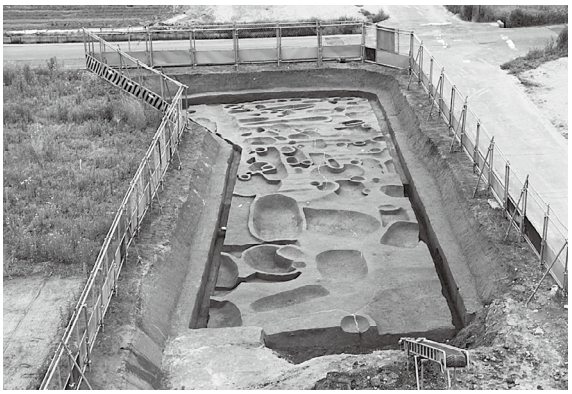


図２　D区３面遺構図



D区１面全景（上半が道路状）



D区２面全景

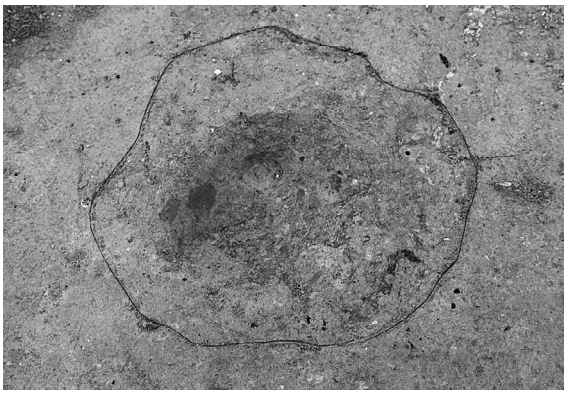
D区４面全景

1490SK土層断面

1320SK 遺物出土状況

2123SK 礫出土状況

167SP 山茶碗出土状況



1306SK 焼土検出状況

壌の水洗篩別作業の結果、鍛錬鍛冶工程の際に発生する鍛造剥片や粒状滓や鉄滓などが抽出された。また、中央部から西部にかけては、中型から大型の土坑が繰り返し掘られ、土坑からは陶磁器・土器類の他に、鉄滓や鋳型片、焼土壁や炭化材などが多く出土している。炉跡などの生産遺構そのものは確認されなかったことから、D区付近で金属製品を生産が行われたものと推測される。この他に、東端部で南北溝１条が、西部で井戸２基が検出されている。

ま　と　め　　今回の調査では、狭小な調査区のために確認された遺構群も限定的であり、昨年度調査区の中に位置づけていかないと正しく理解できないだろう。その中にあって、A区・B区では溝と掘立柱建物跡を中心とする遺構群があり、D区ではそれに金属生産関連遺物などが含まれる土坑群が加わると整理できるだろう。A区・B区ではやや土師器皿が目立つことなどからみて、有力者の屋敷や寺院などの可能性も考えられよう。一方，D区では遺構密度は稠密であることなどを加味すると、商職人が盛んに活動した場所とみることができよう。そして、D区では、これらの遺構を廃して道路状遺構が造成され、それ以降はそこでの活動が低調になったことにも注目しておきたい。

今後は、このような様相の相違を遺跡全体の中にどのように位置づけて評価していくかが課題となるだろう。　（鈴木正貴）